

平成19年12月1日発

「支部活動から全国生涯学習フェスティバルへ」

副会長兼事務局長 齋藤 公男



当会が発足してから5年が過ぎようとしておりますが、その間、県北支部では平成16年度は支部内部における「カルチャー発表講座」を実施し、17年度から一般市民を対象にした「ふくしま学遊塾」がスタートしました。

その年度は、一部の講演には来聴者が10数人得られましたが、他の講演では、民友新聞や福島リビング新聞での広報にも関わらず思ったような成果は得られませんでした。18年度は新聞での広報に加え、学習センターへ

のチラシの配置、さらに知人等への働きかけにより常時10数名の参加者が得られるようになり、地道な努力の成果が報われるようになってきました。19年度は一年を通じて毎月講演と実技を行っており、市民の皆様の期待感と塾の活動意義が実感できる状態になってまいりました。多くの生涯学習提供グループの存在する中で、このような成果が得られることは、会の存在意義が高まったためであり、学習センターなどからも認知され、協力が得られることは嬉しい限りであります。

県内では、会津支部の「いきいき人生塾」が会員制を取ってより大きい成果をもたらしているとのことですが、その努力に敬意を表するものであります。

さて、全県的な今後の会のあり方として、さらなる活性化や人材活用を図るためには他県で実施しているような専門分野ごとのグループ活動の推進や「出前講座」の開設などを行い県内支部間、方部間の交流を推進することも企画されても良いのではないかと考えております。

さらに、来年10月には第20回全国生涯学習フェスティバルが本県で開催されますが、その中で、当会の関与する分野は「生涯学習インストラクター全国大会」への参画と体験学習ブースにおける学習指導ではないかと思われませんが、地道な日常

活動の延長上に本大会を位置づけ、会の存在意義をより多くの県民の皆様にお伝えできないものかと考えております。具体的な内容は今後、企画検討されることと思われませんが、この大会を成功させることにより、会がさらに飛躍発展することを願うものであります。

第20回全国生涯学習フェスティバル

まなびピア ふくしま 2008

まなび愛 うつくしまから 夢発信

平成20年10月11日(土)～15日(水)(予定)

主会場 福島県文化センター ビッグバレットふくしま 郡山市民文化センター

愛知県における生涯学習インストラクターの活動

1 愛知県における現状

愛知県内には、千人以上の資格取得者がいる。各市町村の生涯学習推進委員、公民館など生涯学習施設の運営に関わる人、NPOやボランティア団体を組織し活動している人、教育・文化のグループやまちづくりの運動を広げている人、市民講師や学習コーディネーターとして専門・特技を活かしている人など、学習の成果と資格を活用して、活躍している人たちも多い。半面、資格はとったものの活動の舞台を得られず模索している人たち、又現職で将来の活動に備え準備している人たちもいる。



2 組織

これら活躍する人たちの活動舞台をいっそう広げるとともに、模索し準備する人たちに活動のチャンスときっかけを作ることを目的に、有志の呼びかけで平成15(2003)年4月に「あいち生涯学習インストラクターの会」が結成された。現在のところ会員数は流動的であるが、100余名で活動分野は47種類に及んでいる。

3 会の事業

会の事業としては、情報交換と経験交流のための例会、研修会、シンポジウムなどを開催、会報「ASIニュース」(年間12回)を発行している。



また、愛知県の学習情報システム「学びネットあいち」のネットワーク機関として登録するとともに、愛知県生涯学習推進センター主催の「四季企画展」に出展した。さらに平成16(2004)年5月に行われた「NPOと日進市との協働ルールを確認

する共同署名式」に参加し、市長と署名を交換した。その後その趣旨に沿った活動を展開している。(関連内容下記掲載)

更には各地区への講師派遣事業の一環として、「岡崎100セミ」への積極的な協力を図っている。

4 NPO法人化

活動を一層広げ、さらに会の社会的な信頼度と知名度を高めることを目標に、NPO法人化を申請した。平成17(2005)4月に認証、5月に設立登記を完了した。法人化達成後の最初の事業として下記の事業を進めている。

- 活動分野別公開個人情報(人材ブック)を発行し、県・市町村教育委員会、生涯学習施設、公民館、社会福祉施設等に配布。
- 生涯学習に関心のある市民、社会通信教育受講者・修了者を対象に、「生涯学習実践講座」を企画・開催。
- 日進市の「生涯学習プラザ」指定管理者募集に対して応募、そのための受け皿(共同事業体)として「日進コンソーシアム」を設立した。これは地元のNPO2団体と提携・協働を図るもので、今後の発展が大いに期待できる。

愛知県の活動を全国へ発信することを目的として、日本生涯教育学会で「愛知における生涯学習インストラクターの活動と組織」を報告し、同会奨励賞を受賞した。上記の内容は「生涯学習研究e事典」に掲載された内容の一部である。

(情報収集 HP(生涯学習研究e事典)・機関誌「生涯学習インストラクター」より)

「囲碁と生涯学習」

県南支部・広報委員 徳江 明子



以前から私は、何らかの形で社会に関っていきたいという思いがありました。その様な時にある雑誌で「生涯学習ボランティア」の広告文字に触れ、魅かれました。取柄が無くとも、私に出来ることが見つかるかもしれないと思い、さっそく講座を申し込みました。

「汝、その一隅を照らせ」（最澄）という言葉があります。

自分が置かれている場所や立場でベストを尽くし、それぞれがその一隅をしっかりと守って照らせば、い

つかそれが万燈となり社会全体を照らされていく。

私は、積極性に少々乏しく、人前に出たりするのが苦手です。直そうと思ってもなかなか直せないものです。皆さんの活躍を目の当たりにして、焦りを覚えたこともありました。でも、今は、ささやかな光でも一隅を照らす精神でやっていきたいと思っています。

今、趣味の中で一番力を入れているのは、囲碁です。子どもの頃、父から習いました。結婚してからはほとんどしておりませんでした。平成元年に福島に移り住んでから再び始めました。

現在は福島市にある女性ばかりのサークルに所属しております。

各都道府県持ち回りの女流囲碁都市対抗戦に参加したり、11月茨城県で開催されたねりんピック（全国厚生福祉祭）に福島県の代表として出場できたことと等で、全国の方々との交流ができることは、現在の自分にとって社会とのつながりのパイプの一つで、とても大きな意味を持っています。

その囲碁のおかげで、地元の小学校で二度ほど「昔の遊びの集い」に参加させていただきました。村のボランティア協議会にも登録していますので、そこで生涯学習とのつながりが出来ていけば幸いだと思っています。これからも機会があれば囲碁を通じてお役に立てればと思っています。

～「いきいき人生塾」に参加して～

受講生 佐瀬 ケイ子

生涯学習インストラクターの会会津支部主催の「いきいき人生塾」に参加して4年目、今度も8回の学習会があったという間に終わってしまった感じである。とにかく、内容がバラエティに富み、和気合い合いと楽しく気軽に学習できるのが何よりである。また、会員の中からも講師をやっていただいたり、親睦が深まった同好本会のますますの発展を祈りたい。
(福島県生涯学習インストラクターの会会津支部)

インターネット
「学びの手記
07年夏 第1
集」から情報収
集させていただきました。

会員の活動情報紹介

「生涯学習は、命あるかぎり続くもの」

生涯学習インストラクター 美田 京子さん
(福島市在住)



ボランティアとか生涯学習という言葉は、現在誰もが口にすることが出来ます。かといって実践するのは結構むずかしく、頭だけで考えても先には進まずに、ただ年齢だけが加算されていく、というのが現実でした。

幼児教育に携わってきた私は数年前に定年をむかえ、地域に貢献しなくてはと思いつつも、雑用に追われて月日がすぎました。それでも公民館の講座に出たり、通信教育を受けたり、学ぶことが次々とあつて、一年が早く感じていました。そうこうしているうちに周りから、話しが次々と持ちこまれるようになり、今は私の最大の財産である、親からもらった丈夫な体をフルに活用し、楽しみながらボランティア活動をしています。

子育て支援、学童保育、ドリームサポーター、町内会の役員、小学校区青少年育成委員、後者の育成、学習

県民カレッジ講座 INDEX

Vol. 3

「夢まなびと」に掲載されました。

美田京子さんはご承知のように福島県生涯学習インストラクターの会副会長兼総務委員長、県北支部副支部長の役職を兼務されています。

センターへの参加、その他に趣味の大正琴、折紙、手芸台階など、時間が足りない毎日です。そんな中で心がけている一番大切なことは、規則正しい生活です。

・食事（食事はしていません）

・適度な運動（移動は自転車、ウォーキング）（テレビのみんなの体操）

・睡眠（夜だけしっかりねむる）

あたり前に、愛の力もかりず、負担も感じずに生活出来ることを幸せだと思ひ、いつまでもこうありたいと今日も活動しています。



プロフィール

- 元 保育士 保育所所長
- 現 生涯学習インストラクターとして地域の人たちに折紙を教えている。
- 年齢 七十一才

「活動報告」

県職員ライフプラン講習会の講師を担当して

副会長兼県中支部長 原田 重朗

県職員（50歳代）を対象としたライフプラン講習会（退職準備型）が去る11月21日（月）県庁で開催された。

内容は「ライフプランのすすめ」に始まり、「退職後の医療制度」、「退職に伴う給付、年金」私が担当したのは「退職者からの講話」として、県職員のOBの立場から「退職前の心構え」、「退職後のライフワーク」について、健康、生き甲斐、生涯学習、地域社会貢献等について、40分間講義した。身近な問題として真剣に聴講している雰囲気が伝わってきた。

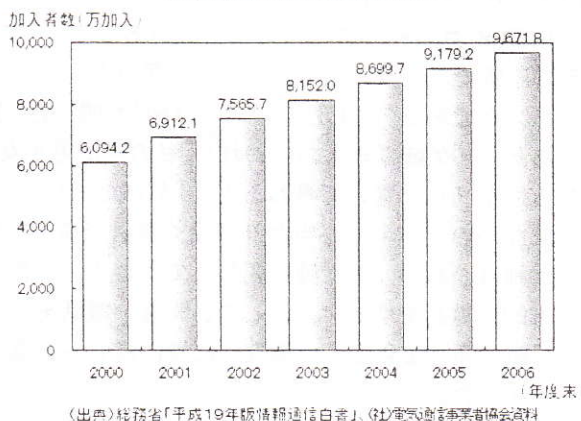
聴講者は会場と、地方県合同庁舎にテレビ中継され、約200名の職員が受講された。

(私の随筆集より) 電話の作法

県北支部 湯田 善一

近頃は携帯電話を持っている人が多い。老若男女を問わずである。この間は、大正生まれのご婦人が携帯電話の操作をしていたのを見て、驚きと同時に“時代の流れ”を感じさせる昨今である。実は私も携帯を持っている一人であるが、持っていると言えば聞こえはいいが、何となく持たされているというのが正確な言い方である。それでは「なぜ携帯を持たされているのか」ということになるが、それは私の悪癖にある。とにかくウォーキングに出れば“鉄砲玉”のよう、宴会には会場も告げずに出てしまうなどで、業を煮やした妻が、私の身を案じて取った“苦肉の策”だったのである。最初、携帯は若者だけが持つものと偏見をしていた私であったが、持ってみると以外や以外、その便利さに“うつつを抜かず”ようになった。今では携帯を楽しんでいるのが実態である。私の体験した、面白くて悲しい“電話今昔物語”を述べねばなるまい。

携帯電話の加入者数の推移



時々突然に、ところ構わずに携帯が鳴ることがある。驚いて、携帯を手にし覗き込むと、見知らぬ番号が表示されている。そんな時「電話に出ると『振込めサギ』に遭うので、絶対に出ないように」、との妻からの厳重な言い渡しがあり、表示された番号を横目で睨みながら、決して出ないように心がけている。私にとって携帯とは「間違い電話の留守番」のようなものである。私は65歳になるが、未だに勤めを持っている。俗にいう「第二の職場」である。長年、電車通勤であるが、考え方一つで楽しいものである。私の場合は、本を読んだり、知人との会話を楽しんだり、時には“瞑想に耽る”ことも……。そして、こっそりと携帯のニュースを眺めるなど、楽しみ方は様々である。一番面白くないのが車内のアナウンスである。それは、毎日繰り返し流されるコマーシャルである。「〇〇の医院は親切だ」とか「△△の飲み屋は安くてうまい」などで、乗客の中には、私のように「雑音」と感じている人も少なくない。

もう一つは携帯電話の「使用禁止放送」であるが、なぜか形式的なので辟易する。車内の窓ガラスを見ると、「携帯電話のマナー」が、シールで貼られている。その文言を読むと“車内では「マナーモード」に設定し、通話は「ご遠慮ください」とある。車内では「携帯の電源をお切りください」と執拗に放送をしているが携帯使用の客には“馬耳東風”。一向に効き目がない。そして不思議なことに「なぜ禁止しなければならないのか」。その目的のアナウンスを聞いたことがない。車掌が車内を行き来しているのをよく見掛けるが、携帯電話で話している乗客を見つけても“知らんぷり”。終には注意を喚起することもない。こんな様子なので、時々訳の分からぬ事態が起きてしまう。

一昨年桜の花が満開の頃、勤め帰りの電車内のことである。その日は少し混雑気味であったが、数人が携帯メールに夢中になっていた。乗客は勤めや学校帰りのサラリーマン、OL、高校生、主婦などいつものようにバラエティに富んでいる。とその時、進行方向に背を向けて、喜寿

ほどの老人がすっと立ち上がり、乗客を見渡し睨み付けると、いきなり「よく私の話を聞け！放送で携帯を『切れ！』と言っているのに、なぜ切らないのか。おまえらには聞こえないのか！だから日本人は駄目だと言われるんだ！この馬鹿者ども！」。老人は大声でそう怒鳴ると、スタスタと別の車両へと立ち去っていった。次の車両内でも、その大きな声がかすかに聞こえていた。多分、同じように「布令」回ったに違いない。まるでテレビドラマで見る戦争中の軍人さんの“命令口調”のようだ。注意を受けた肝心の乗客は、一瞬老人の顔を見たものの全くの“どこ吹く風”。「変な御仁が、何か怒鳴っていった」という感じで、その後も何もなかったかのように一心不乱にメールに耽っていた。

今年 8 月の初めにもこんなことがあった。うだるような暑さは、さすがの私もウンザリ。自宅の座敷でクーラーをかけ、熊の冬眠のようにうつらうつらしていると、急に私の携帯のコールソングである“きよしのズンドコ節”が鳴った。妻との禁を破り、恐る恐る携帯に出てみると、「ああ、タゲ姉ガヨ！おれおれ」。私の声が男か女か分からぬほど錯乱状態のようだ。「エッ、どちらさん？」と驚いて尋ねると、「あんただれ？ほらおれだよ、俺！」。勿論私の妻は「タゲ姉」ではないので、全く心当たりがなく無言で様子を探っていると、その男、「何んで黙ってんだ。タゲ姉はいねの、タゲ姉に変わってケロ！」と意味不明の電話。そこまで聞くと、さすがの私も一方的に電話を切った。そして、間違い電話をかけてきたその人に「憤り」を覚えたものの、その“頓珍漢”な会話と会津訛りに妙に親しみを感じ、いつの間にか一人、その人の偶像を思い巡らせていた。

ある日のこと、知人から息子の携帯の電話料金のことで相談を受けた。「スネを齧っている分際で、毎月何万という料金の請求がくんだガラ。どうしたらいいんだべえなあ。あの野郎は暇せあつと、女（おなご）としゃべっていんだガラ」と息子をなじる。私は咄嗟に「色男なんだベガラ？と聞くと、「まあ、俺に似て『見てくれ顔』だけはナ」と、得々と冗談を飛ばす。「そういう息子さんでは、金がカガッテも仕方ねえんだべえ」と、“親の躰（しつけ）”が肝心であるという、世間一般の「ありふれた話」をすると、「俺も若ゲエ頃は、ああだったガラナイ」とばかり、妙なところで納得する。やはり教育は、家庭の「躰」からなのかも知れない。

最近の携帯業界は過当競争だという。携帯機能も段々と良くなって、今では写真は撮れ、テレビも見ることができる。「携帯一つあれば何でも出来る時代になった」と、テレビのコマーシャルで聞いた。私も妻に「せめてテレビを見れるものと交換してくれ」と懇願しているが、「料金が高く付くので駄目だ」と一喝され、夢は絶たれている。今の若い人は、最新の機能を持つ携帯を四六時中使用するので「料金も馬鹿にならない」ということを聞いたことがある。親にしてみれば「穀潰し」と言いたくもなる。高校生がなぜ『携帯電話』が必要なのか、そして料金がなぜそのようにかかるのか、私には未だにその訳が分からない。世の中があまり便利になるのも善し悪しであり、金の値打ちも分からぬような子に、親の経済力に“物をいわせ”流行に追随し“最新の高価な機器を買え与えること”は、考えものであるというのが私の持論である。

私の高校生の頃は、今からみれば何もかも不便な時代であった。その一つに電話があった。日本の電話の歴史を紐解いてみると、その歴史はかなり新しい。明治 23 年 12 月 16 日、日本初の電話が東京～横浜間を開通する。交換局は東京千代田区に置かれ、交換手は女 7 人に夜勤専任の男 2 人で発足したというから、何とささやかな開業であろうか。当初の加入者は、官庁を含め東京で 155 人、横浜で 42 人、通話料金は東京～横浜間、5 分で 15 銭であったと歴史の文献に記されている。因みに、開通最初の挨拶は「オイオイ」だったという。その後日本全国ダイヤル化即時通話の完成は、昭和 5 4 年であった。こんな便利な時代が来ようとは、誰が想像しただろうか。

今から遡ること 50 年、昭和 30 年代当時。商店や裕福な家を除いては電話機がなかった。我が家は農家なので必要もなかった。それに電話などの“文明の利器”には、とんと縁のない生活

ぶりであった。急用以外今のように電話で話すことも連絡することもなかった。緊急で電話を使うのは「危篤の電話」くらいのものである。それも“呼び出し電話”である。“呼び出し電話”とは、「隣近所で電話機がある家にかかってきた自家宛の電話を、取り次いで貰うこと」であるが、私は高校3年になるまで、この“呼び出し電話”でさえも、満足に使うことができなかった。我が家に“呼び出し電話”がくるたびに「恐怖感」さえ覚えていたものである。ある時、担任の先生から就職のことで、“呼び出し電話”があり、止むなく我が家の向かいにあった、魚屋さんの電話口に駆けつけ“発明王エジソンの考案したような電話機”と対峙し、慌てふためいたことがあった。初めての経験で、頭が真っ白になっている私に、先生は「何を話しているのか、もっと要領よく話せ!」と怒られ、それ以後「電話恐怖症」に陥った思い出がある。今考えると恥ずかしい話であるが、電話がそんな高価な物だった時代なのである。

電話の交換嬢は、役所や会社といった組織の顔であるというが、先日ある会社に電話したがなかなか出ない。呼び出しが鳴っているのにである。個人の家ならいざ知らず会社なので、直ぐに出るのが当然、と思い込んでいるせいかイライラが募る。「交換嬢は何をしているんだろう。トイレかな?」など余計な勘繰りをしてしまう。意地を張って、少しの間呼び出しをしていると、「はい」と気の抜けた返事で、中年女性のような声の持ち主が電話に出る。「〇〇さんをお願いします」と告げると、「あなたは?」とこちらの身許を究明してくる。むやみに外部の電話を取り次ぐのは問題だろうが、交換嬢などにいちいち名乗ってみても仕方がないという意識があるので面白くない。挙げ句の果てに「今日は、いねえようだなあ」に至っては「何をかいわんや」である。

私が相談員になって6年になるが、いつの頃からか「電話相談ほど難しいものはない」と思うようになった。しかし、時々なぜか電話がかかってきて心が安まる時がある。それは、電話の理屈としては、かける側の都合が優先するものであるが、かける前に「今、電話をかけて相手に迷惑ではないだろうか」と考えるだけの“余裕”と“思いやり”を持っていて、はじめに「今、すこしお話ししてよろしいでしょうか」と、こちらを気遣ってくれる人がいることである。その“心遣い”が何にもまして嬉しいのである。長電話になりそうだったら、それくらいの配慮は当然だと私は思う。

職場では、かつて「電話のかけ方のマナー講習会」なるものがあった。先輩方から電話のかけ方や受け答えの「手解き」を受けるのであるが、今でもその教えが役に立っていることに驚く。その一つには電話の原点である「相手を気遣う」という“言葉の作法”があったからに相違ない。しかし、今や誰もが所持し簡単な操作で事足りる「携帯時代」である。簡便さ故にあらゆる面で、日本の美德とされてきた。“言葉の文化・礼儀・作法”がことごとく崩壊しているという現実がある。悲しいことではあるが、私にはどうしてもそう思えてならない。

“俳聖松尾芭蕉”に『不易流行』という教えがある。『不易』とは、時代を経ても“衰えないもの”“変えてはならないもの”、『流行』とは、時によっては“衰えてしまい変えなければならぬ”という俳諧の考え方である。日本の“電話文化”について、“何を残して何を变えればいいのか”私にはその術を知らない。しかし世間では、携帯電話の「簡便さ」が禍しているのか「ネット犯罪」が横行し、携帯電話を悪用した「振り込めサギ」のような、金銭トラブルが後を絶たない。『電話の作法』が乱れに乱れているのである。これは単に、日本人が「伝統」として守り続けてきた“言葉の作法”や「人には迷惑をかけてはならない」とする“道徳”を失っているからではないか。これらは皆、簡便な生活を迫及したばかりに、どこかに置き去りにされた“美德”ではないか。「便利さ」を真に享受するとはどういうことなのか、それはどのような意味があることなのか。今、一人一人が原点に立ち返り、真剣に問い直してみる必要があるのではないかと私は考えている。(福島県生涯学習インストラクターの会会長)

各支部からのご案内

◆ 県北支部から「ふくしま学遊塾」下期計画のご案内 (平成20年2月29日までの事業)

回	日時	講座名	内容	会場	講師
4	12月8日(土) 9:30~15:00	自然観察 里山を歩く パート2	・初冬の森林で不思議を見つけ学ぶ。 ・里山は伊達市月舘町(小手七つ森)予定 ・定員15名 ・費用:実費頂くことあります。	月舘町:御代田公民館	生涯学習インストラクター 阿部明義 (024-573-3444)
6	平成20年 1月26日(土) 13:30~15:00	講演 文豪シリーズ④ 「奥只見湖と三島由紀夫」小説 -「沈める瀧」-	スライド講演 ・三島由紀夫の生涯と作品 ・福島県ゆかりの「沈める瀧」の原風景を辿る。	福島市中央学習センター	生涯学習インストラクター 菊地昌彦 (024-548-0825)
7	2月23日(土) 9:30~15:00	講演 やさしい家庭果樹づくり	果樹を庭植え、鉢植えにして、美しい花を楽しみ、おいしい果実を実らせるポイント(栽培技術)を学びましょう。	福島市清水学習センター本館	生涯学習インストラクター 中村紘夫 (024-593-0465)

- ・申込み一県北支部以外の方、一般の方大歓迎です。直接講師宅にお申込み下さい。
- ・申込み期限~講座開講の5日前とします。当日でも自由に参加できます。

◆ 会津支部から「いきいき人生塾」へのご案内

※会津支部以外の方、一般の方、それぞれの回のみでも結構です。ご参加下さい。(鈴木支部長宛に申込み願います。TEL0242-28-2038)

回	内容	日時	会場	担当者
第7回	「韓国料理に挑戦」	12月9日(日) 10:00~	南公民館	主婦 五十嵐ヒヨンスーク先生
第8回	「手と手をつなぐこと」 記念品作り・閉講式	1月13日(日) 10:00~	中央公民館	元会津若松市中央公民館長 伊藤禮子先生 生涯学習インストラクター 鈴木 隆子

広報委員会からのお知らせ

- 当初の編集計画の内容を諸事情により変更させていただきながら、発行させていただいています。ご理解いただきたいと思います。
- 最近寄稿していただける方が増えつつあります。広報委員会としては大変嬉しく心から感謝申し上げます。

編集後記

今年の締めくくりとなる「曙光」の発行、今回は6回目の発行となりました。これまで、編集に携わってこられた方々に感謝の念をいだし、来年も本会の情報発信源としての本紙であり続けたいものと思っています。皆さん良いお年を!
(広報委員 星 勝好)